

一九一五年の切通し坂

岸田劉生作《道路と土手と塀（切通之写生）》について

蔵屋美香

「私は此処に初めて居を卜してから、もう十年近くなるが、この間の変遷は実に夥しいものである。都会の膨脹力は絶えず奥へと喰い込んで行っている。昔、樺の大きな並木があったところに、立派な石造の高い塀が出来たり、瀟洒な二階屋が出来たり、この近所では見ることが出来なかつた綺麗なハイカラな細君が可愛い子どもを伴れて歩いていたりする。停車場へ通う路には、もとは田圃であつたところに、新開の町屋がつづいて出来て、毎朝役所に通う人達が洋服姿でぞろぞろと通つて行く。」

これは田山花袋が『東京とその近郊』のなかで描いた、現在の渋谷区代々木あたりの風景である。この本は一九一六（大正五）年四月に出版されているから、彼が目にしてゐたのは、その前年の十一月の年記を持つ岸田劉生の《道路と土手と塀（切通之写生）》が捉えた、まさに同じ時期の代々木のありさまであつたと言つてよい。花袋は一九〇八（明治四十一年）年から代々木山谷一三三番

地に住み、劉生は一九一三（大正二年）から十六年にかけて、同じ代々木山谷の一七番地、続いて二九番地に、借家住まいをしていた。もとより雑誌『白樺』誌上で幾度か罵倒の対象となつた自然主義文学の作家と、他ならぬその『白樺』の盟友である劉生とが、交流を持つたかどうかは詳らかにしない。しかし、「立派な石造の高い塀」に画面左手にそびえる塀を、さらには「ハイカラな細君」と「可愛い子ども」に劉生の妻と、この頃一歳半になろうとしていた愛娘麗子の姿とを重ねて、二人の作家が見た一九一五年当時の代々木切通し坂の姿を追いかけてみよう。

小田急線で新宿から二つ目の参宮橋駅を降り、住宅の立て込む谷あいの道を数分ほど辿ると、現在の代々木四丁目、今も劉生の描いた切通しの坂がある。坂を登り切つたところ、つまり画面のなかの青空の向こうには、明治神宮へと至る西参道が南北に走っている。もとは青山練兵場と呼ばれた

広大な荒地を含むこの代々木原一帯で、明治神宮と諸参道の造営工事が始まつたのは、ちょうど《切通》が描かれた一九一五年のこと。これに引きずられる形で、以後あたりは花袋が描いてみせたように急速に住宅地として開けていく。つまりこの切通しは、神宮造営工事の過程で、高所を通る西参道と、宅地化する低地を走る細道とを結ぶために、台地を掘り崩して生まれた坂なのである。画面の左に見える石塀は侯爵山内豊景邸のものであつたが、この塀も坂を通すのに伴う屋敷の地所拡大によつて造られた、真新しいものだつた。右手の土地では劉生自身の言葉によれば、幼稚園を建設するための工事が進められている。現在の私たちの目には「草と土」の匂いに満ちたものと映る《切通》の画面は、実際には開発の波に飲み込まれていく瞬間の武蔵野の風景を捉えたものであつた。劉生や花袋にはこの坂が、日々刻々と伸び広がっていく都市の最前線の姿に映じていただろう。

この坂の地形はいまだにかなり複雑である。坂は一度画面の頂点の部分まで急勾配で登りつめ、少しなだらかなつてから西参道にぶつかる形になっているので、後ろに続く緩い坂は手前の急勾配の後ろに隠れてしまい、画面にあるように、道が唐突に断崖絶壁となつて空の向うに消えてしまうような錯覚を与える。しかも一九一五年の切通しでは、その頂上部分の土が石塀の立つ地面の高さよりかなり隆起しているらしく、道と塀とが消えていく接点にすぎまがあり、そこにも（慌てて塗り加えられたような）青空がのぞいている。もとより膨らんだり細くなつたりと微妙に道幅を変化させながら蛇行する坂道を正面から捉えようとするのだから、一点透視で坂の遠近を描きとろうとしても、道は素直に奥へ伸びて行くようには見えない。塀の奥行き、坂道の奥行き、右手の土地の奥行き、これらそれぞれが微妙に食い違ふのは、たぶん劉生の恣意的な変更のためではない。さまざまに異なる

隆起の連りである台地と、そこへ無理に切り通された道とは、それを作り出した人間にも予測できなかった、奇妙にねじれて入りくんだ空間を出現させていたのである。

劉生は生涯に多くの美術論を残したなかなかの論客であったが、その中で、「美は人類の内面にある」「内なる美」のであって、決して自然そのものの中にあるのではない、と語っている。人類は、そして就中芸術家は、自己の内面から美を生み出して形にし、それらをもつて自然を装飾して、この世界をより美しく完全なものとする使命を負っている、というのである。劉生の芸術観は時期によって多少の変化を見せるが、その底には、芸術がこの世界を作り替えるという、いわば世界改造のための芸術というヴィジョンが、何らかの形で常に流れているようである。「芸術とは或る云ひ方をすれば自然を変へる事である」「同上」と言い切る劉生には、引き裂くようにして大地を開き、長く地中に眠っていた赤土を剥き出しに晒す、そんな人間の力が生み出した切通しの、神秘的でさえある風景が、自己の芸術のメタファーであるかのように映ったのかも知れない。

一九七〇年代まで残っていた旧山内邸の石塀は、マンシヨンの駐車場に変わってしまい今はない。道は早くにアスファルトに覆われて、高速道路が坂の向こうの空を塞いでいる。しかし今一度画面に目を凝らし

てみよう。石塀にはごつごつした石の表面さながら、小さく凹凸に絵具が盛り上げられている。あたかも筆と絵具とによって、この画面上に石を再創造しようとしているかのようである。また関東ローム層の湿った赤土は、明るい茶色の絵具という物質を借りて、新しく画面の上に捏ね直されているようだ。一度、額を外されてはだかになった《切通》を見たことがあるが、それはまるで輝く絵具で作られた、物体そのもののような存在感をたたえていた。劉生はまた、芸術作品とは、自然界には存在しない、「美の要素そのものばかりで組み立てられた」「同上」、人間のみが生み出しうるまったく新しい「人工物」である、と述べている。代々木切通し坂は、人間と自然とが相争う開発の水際に姿をあらわした、まさに人工の風景であった。そしてまた岸田劉生という一人の人間の手が生み出した《道路と土手と塀切通之写生》という「人工物」は、絵具の厚みと筆致とによって、この世界の空気を押し開いて存在している。描かれた風景が大きく趣を変えてしまった今も、土を崩し、絵具を練る人間の力の、二重のイメージを宿しながら、劉生の芸術の謂そのままに、この作品はわれわれの手に変わらず残されているのである。

(美術課研究員)

*なお、この原稿を書くにあたり、渋谷区立白根記念郷土文化館の中山正男氏にご教示を賜りました。御礼を申し上げます。



岸田劉生 〈道路と土手と塀(切通之写生)〉 1915年

◎ 展覧会名 岸田劉生―所蔵作品と資料の展示

◎ 会 場 東京国立近代美術館(本館)二階展示場

◎ 会 期 一九九六年六月一日(土)―七月七日(日)